

0 4	春日井	岩成台西小学校	名前 水 野 麻 吏
分科会番号	6	分科会名	生活科教育

人とのあたたかいつながりを大切にし、主体的に行動できる子の育成

～学校目標を生かした授業づくりと継続的な活動を目指して～

1 主題設定の理由

卒業を控えた6年生の児童から、こんな問いを受けたことがある。「職員室に先生ではない人がいるが、あの人たちは何をしているのか。」というものだった。その言葉に同調するように、何人かの児童が同じような質問をしてきた。彼らは6年間、用務員の方や事務員の方がどのような形で学校に関わっているのかを知らずに過ごしてきたようだった。用務員の方とも事務員の方とも、何度も関わる機会があったのに、なぜ彼らは知らなかったのか。推測するに、そうした人に注目する活動がなかったか、実際に生活の中で関わっていても、意識することなく通り過ぎていたのではないだろうか。

生活科はその目標に、「具体的な活動や体験を通して、(中略)自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を(中略)育成することを目指す。」とある通り、児童が対象に直接働きかけることを前提としている。生活科の学習の中で身近な人に関心をもち、どのような形で自分と関わったり支えられたりしているかを知することは、人とのつながりを実感し、関係を築くために重要である。高学年になってから周囲の存在に気づくのではなく、学校生活のスタートである1年生の段階から自分を支える人々の存在や温かい関わりに気づかせたいと考えた。そこで、生活科「がっこうだいすき」の単元で「人とのつながり」に関して、「大切にしたい」「仲よくしたい」という自分の思いをもって取り組み、その思いを継続する児童の姿を目指した。また、本校では、今年度の学校目標を「人とのあたたかいつながりを大切にして、みんなで伸びる岩西っ子」としている。この実践を通して、児童が学校目標である「人とのつながり」を実感し、関わろうとする意欲や姿勢を育てたい。

2 研究の構想

(1) 目指す子ども像

- ・身近な人に関心をもち、自ら相手とつながろうという思いをもてる子。
- ・粘り強く取り組み、継続的に人とのつながりを大切にできる子。

(2) 研究の仮説と手立て

【仮説1】 具体的なつながり先を示すことで、目標をもって取り組むことができるのではないか。

【仮説2】 時間の経過とともに、あいさつやつながりに対する意識は低下するが、様々な手立てを少しずつ取り入れることで、継続的に周りの人とつながろうとする気持ちが芽生えるのではないか。

【仮説1 具体的なつながり先】

本実践では、子どもが無理なく人との関係づくりに取り組めるよう、身近な存在から順に関わる対象を広げていけるように構成した。友達→学校の大人→特別支援学級の仲間→地域の方々と段階的に広げることで、つながりへの関心と意欲の高まりをねらった。

つながり① 友達とつながる

友達との関わり方について指導した。生活の授業の中でだけでなく、どの授業でも「友達の話をきくこと」が大切であることを折に触れて伝えた。また、相手の名前を覚えることで仲良くなれることを説明した。グループ活動をするときなど、相手の名前を呼ぶこと、話を聞くことを確認した。

つながり② 学校で働く人とつながる

「担任以外に1年生がよく関わる先生（校長・教頭・教務主任・校務主任・特別支援学級担任）を取り上げて紹介した。また、用務員さんや事務員さんの話を聞いたり質問をしたりする機会を設け、学校で働く教員以外の人に関心を寄せ、関わりをもつように促した。

つながり③ 特別支援学級とつながる

特別支援学級については、NHK for School の番組『u&i』シリーズ中の放送回「ひまわり学級ってどんなところ？」を活用し、授業や生活の様子、得意なことを紹介する場面を児童に視聴させた。交流に来る子どもについて、教室にいない時間があってもクラスの仲間であることを説明し、特別支援学級の子どもも含めて、みんな大切なクラスの子どもたちであることを伝えた。

つながり④ 地域とつながる

見守りサポーター（登下校の見守りボランティア）の方にお世話になっていることや、自ら関わろうとすることの大切さを説明した。

【仮説2 継続的に取り組むための手立て】

手立て①	学校探検を行い、施設の特徴に気づかせる。
手立て②	あいさつカードにあいさつをした人を記録し、最後まで終わった子には表彰状を渡す。
手立て③	見守りサポーター（登下校ボランティア）についての掲示物を活用し、自分の登下校するときに合う人の名前を確認させる。
手立て④	全校一斉でスマイルタイム（ソーシャルスキルトレーニング、1回15分程度）を行う。形式的なものにならないように、子どもたちの様子を見ながら、自分のことを話したり、相手のことを聞いたりする技術や、うなずきや表情などの非言語のコミュニケーションの大切さを伝える。（5月～通年・月に2～4回）
手立て⑤	全校一斉（児童会主催）のあいさつビンゴを行う。ゲームに意識が行き過ぎないようにビンゴが終わった後に振り返らせ、人とのつながりの価値やこれからどのような態度で過ごすかについて考えさせる。その後、あいさつカードを自分で作り、友達と交換し合ってあいさつカードを使った活動に取り組む。
手立て⑥	自分の気持ちをさわやかに伝える力を育てることをねらい、自己決定やルールの大切さを各学期のはじめに指導する。

3 実践の様子

(1) 単元の流れ（生活科 1 2 時間＋学活 1 時間）

時	内 容	意識するつながり・手立て
1～3	ともだちと がっこうを たんけんしよう	つながり①② 手立て①
4～7	がっこうに いる ひとと なかよく なろう	つながり②③ 手立て②
8～10	がっこうで みつけた ことを つたえよう	つながり①
11・12	みんなで つうがくろを あるこう	つながり①④ 手立て③
学活 3（随時）	・スマイルタイム（SST） 15分×3 ・あいさつビンゴについて 15分 ・3くみについて（特別支援学級について） 30分 ・遊びの指導 30分	つながり① 手立て④⑤⑥

(2) 手立ての実際と児童の様子

手立て① がっこう たんけん

学校のことを知りたいという思いを大切にし、学校の施設の特徴に気づくことを目標とした。施設を巡る過程で、他学年が学習する様子を見たり、先生とあいさつや会話したりした。（図1・図2）

単に「どこに何の部屋があるか」を見るだけでなく、そこで働く先生方の表情や仕事の様子にも目を向けさせた。教室に戻ってからの振り返りでは、『保健室の先生が「いつでもおいでね」と言ってくれて嬉しかった』『用務員さんが学校をきれいにするために草抜きをしてくれていた』など、施設の中にいる人々の温かい関わりや支えに気づくつぶやきが多く見られた。こうした「人」への想起を丁寧に行ったことで、学校に関わる人々への親しみや関心を深めることができた。



図1 クラスごとに学校探検をしている様子



図2 班ごとに学校探検をしている様子

手立て② あいさつカード

学校探検を終え、学校にいる人への関心が高まったところで、「あいさつカード」（図3）を作成・配付し、あいさつを記録させた。記録がすべて終わった児童には表彰状を渡し、達成感を味わえるよう

手立て③ 見守りサポーターに関する掲示物の利用

授業の中で、「この人に会ったことがある人？」と写真を見せながら問い、挙手させると、「この人、学校来るときにいるよ！」「○○さんっていうのだ！」とうれしそうに話す姿が見られた。活動の前にサポーターの名前を知っていた児童は2名のみだったが、活動を通して地域の方々への関心が高まり、親しみをもって関わろうとする気持ちが育っていると感じられた。

手立て④ スマイルタイム

お世話になっている せんせいに あいさつにこう！

なまえ

	おなまえ	あいさつした日	いふ
写真 (校長)	せんせい	☐ ☐ ☐ ☐	
写真 (教師)	せんせい	日付を記入させる。	
写真 (教務)	せんせい	☐ ☐ ☐ ☐	
写真 (校務)	せんせい	4回あいさつしたら 提出してシールをもち らう。	☐
写真 (用務)	<u>さん</u>	☐ ☐ ☐ ☐	
写真 (事務)	<u>さん</u>	☐ ☐ ☐ ☐	

【さくあのせんせい】

特別支援学級の
担任・支援員

写真	せんせい	☐
写真	写真	せんせい

図3 あいさつカードのイメージ

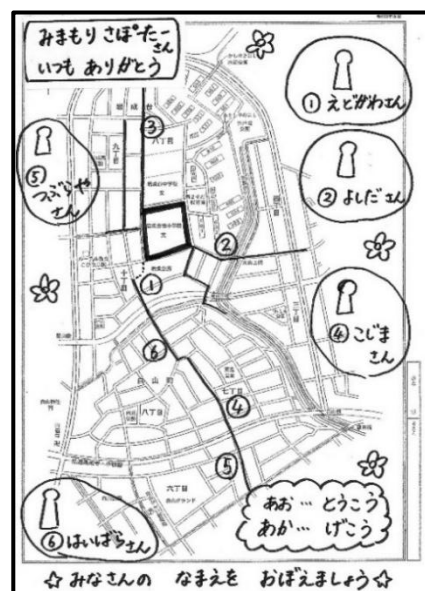


図4 見守りサポーターに関する掲示物のイメージ

手立て⑤ あいさつビンゴ

1学期には、児童会主催による「あいさつビンゴ」を全校で実施した。いろいろな先生方や、あいさつ当番をしている児童会役員、校務支援員の方々などとあいさつを交わすことで、普段は関わる機会の少ない人とも自然な接点が生まれた。2学期の後半には、あいさつビンゴを自分で作成し、友達のビンゴと交換して実践する活動を取り入れた。(図5) ゲーム性に偏らないように、あいさつをするとどんなよいことがあるかを考えさせ、あいさつへの意識を高めさせることができた。

手立て⑥ アサーション・トレーニングの基礎

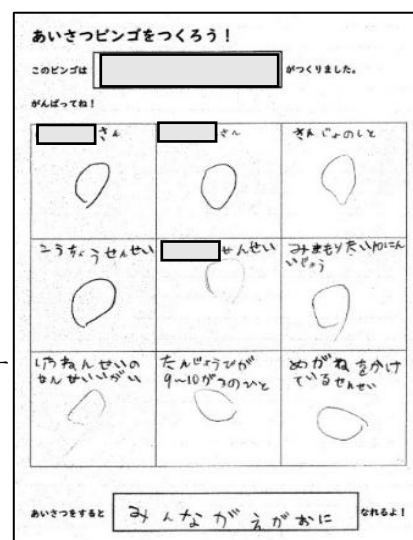


図5 児童が作成したあいさつビンゴ

人とのつながりの中には、心地よく関わるための最低限のルールがあることを確認した上で、「自己決定の権利があること」や「気持ちを相手に伝えることの大切さ」を、易しい言葉で伝えた。「遊びを断る権利があること」や「やめて」ということの大切さなど、具体的な場面を扱った。怒ったり泣いたりするのではなく、自分の気持ちや考えを適切に表現できるように、少しずつ練習していった。すぐにはできるようにならないが、学級経営の指針として相手との関係を大切にしながら、自分の思いや考えを適切に伝える力を「爽やかな自己表現」として位置づけ、日常の中で育てている。

(3) 手立ての効果と考察

以下に、立てた2つの仮説に基づいて、それぞれの手立てがもたらした効果について考察する。

【仮説1】 具体的なつながり先を示すことで、目標をもって取り組むことができるのではないか。

この仮説については、「誰とどうつながるか」を明確にしたことで、児童が迷うことなく目標をもち、やろうと思ったときに主体的に取り組むことができたと考えられる。実際に、あいさつカードの主な活動時間は登校時や休み時間であったが、児童は自発的に活動していた。特別支援学級の前を通る際に先生を探したり、登校指導をしている先生に自分からあいさつしに行ったりする姿が見られ、意欲的に取り組んでいた。また、普段は意欲的でなく、ワークシートの提出が遅れがちな児童Aも、自らあいさつカードを取り出して記入を始め、徐々に日付が埋まっていった。もらったシールを励みにあいさつを続ける様子も見られた。

下記の表から分かるように、あいさつカードや掲示物の利用を始める前の5月と実施後7月のアンケート結果を比較すると、児童の「話したり遊んだりしたい人」が増え、さまざまな人とつながりたいという気持ちが高まっていることがうかがえる。

【表 話したり遊んだりしたい相手への「はい」回答児童数の比較】

	5月1日(25人中)	7月1日(24人中)
話したことのない先生	10人 (40%)	16人 (67%)
遊んだことのない1年生	22人 (88%)	17人 (77%)
見守りサポーター	4人 (16%)	16人 (67%)
特別支援学級の児童	15人 (60%)	20人 (83%)

全体として肯定的な変化が多く、特に「見守りサポーター」「話したことのない先生」への関心が大きく伸びていることから、児童の交友関係や人間関係が広がっている様子が見られた。「遊んだことのない1年生」への関心がやや減少している点は、交流が進んで、「遊んだことのない1年生」が少なくなったためではないかと推測した。

【仮説2】 時間の経過とともに、あいさつやつながりに対する意識は低下するが、様々な手立てを少しずつ取り入れることで、継続的に周りの人となつたろうとする気持ちが芽生えるのではないか。

この仮説については、あいさつカードの取り組みにおいて顕著な変化が見られた。5月中旬にあいさつカードを児童に配付し、ほとんどの児童が熱心にあいさつや記録を行った。しかし、1週間ほど経つと、次第に意識が薄れ、自分からあいさつに行かなくなる児童も見られた。2週間ほどが過ぎると、毎日コツコツ記録していた児童の中から、あいさつカードを完了する子が出はじめた。その子どもたちに表彰状を渡すとともに、継続することの素晴らしさや大変さを話した。記録をしていなかった児童の中には、その日から記録を再開した児童もあり、意識付けの大切さを改めて感じた。他のクラスでも同様の取り組みを行ったが、表彰状を渡した児童がいることで、他の児童の活動のペースが上がる効果が見られた。

ただし、あいさつカードに関しては、実際の行動と異なる記録をする児童が見られた。達成感を重視するあまり、目的より記録が先行してしまった児童については、今後、行動の背景にある気持ちの面に目を向けたい。また、様々な手立てを同時に取り入れたため、どの方法が実際に効果的であったかは主観的な判断にとどまっており、今後はより客観的な検証が求められる。

4 実践を通して見えてきたこと

今回の実践では、人とのつながりをテーマに指導を行ってきたが、活動を進める中で、「生活科の授業そのもの」以上に、生活と学びをつなぐ教師のまなざしの重要性に気づかされた。あいさつカードや SST といった手立ては、あくまできっかけに過ぎず、子どもたちが実際の生活の中で誰かと関わろうとする瞬間を、どうすくい取り、どう育てていくか。その積み重ねが、「つながりを大切にしようとする心」を育てることにつながっていくのだと感じた。実際に、引っ込み思案な子どもが勇気をもって自分からあいさつする姿や、特別支援学級の先生や児童と関わろうとする姿など、生活の中での自然な変化がいくつも見られた。それはまさに、授業で学んだことが生活に結びついているあらわれだった。

また、教育相談の時間に「学校で楽しいことは何か」と児童一人一人に尋ねると、たくさんの子どもが「友達と遊んでいる時間」と答えた。友達がいるから頑張れる、人とつながっているから学校に来られる——そんな子どもたちの思いに触れ、人とのつながりを健全に育て、支えていくことの大切さを感じた。

こうした実践を通して、自分が大事にしていきたいと思えることが、少しずつ見えてきたように思う。教師が常にアンテナを高くして、子どもたちに必要な力を感じ取ること。授業と生活は分かれているものではなく、生活の中にこそ学びがあるということ。それらを実感として捉えることができたのは、一教員として印象深い経験となった。